

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 前田朋美

論 文 題 目

世紀転換期のグスタフ・クリムトにおける身体表現と素描：
ウィーン大学、講堂の天井画を中心に

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	木俣元一
委員	名古屋大学教授	伊藤大輔
委員	名古屋大学教授	栗田秀法
委員	名古屋大学教授	佐々木重洋
委員	名古屋大学特任講師	松井裕美
委員	日本女子大学教授	河本真理

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、ウィーン世紀末を代表する画家グスタフ・クリムト（1862-1918）が残した大量の人物素描を対象として、画家が1894年に依頼され世紀転換期に取り組んでいたウィーン大学講堂の天井画（通例「学科絵」と呼ばれる）に加えて、1902年に開催された第14回分離派展のために上記天井画と並行して描かれた《ベートーヴェン・フリーズ》においてクリムト様式が確立された際、画家が試みていた芸術的探究で素描が果たすことになった新たな役割を明らかにするとともに、これらの素描の分析を通じて当時のクリムトにおける造形的及び主題的関心の所在を考察することを目指している。

第1章では、クリムトの生涯と画業、19世紀末から20世紀初頭にかけての世紀転換期のヨーロッパ、特にウィーンにおける諸芸術の動向や分離派の活動を概観し、先行研究に見られる議論の流れと問題の所在、素描を研究する意義や論者の目指す研究の方向性を簡潔にまとめている。第2章では、世紀転換期におけるクリムトの素描を考察する前提として、形成期にあったクリムトが1876年から所属していた王立オーストリア芸術産業博物館附属工芸学校で受けていた教育とこの時期に制作した素描、そして芸術家カンパニー時代にクリムトが制作に関与した《豪華画集I》（1882-84）に見られる寓意と象徴を主題とする素描の特徴を説明する。第3章では、学科絵が依頼される以前にクリムトが携わっていたブルク劇場階段室の天井画（1886-88）、《旧ブルク劇場の観客席》（1888-89）、ウィーン美術史美術館階段上の壁画（1890-91）を対象として、完成作と密接に対応する準備素描とイメージ・ソースとして利用された写真が制作過程において果たした役割を作品に基づいて考察する。第4章では、学科絵に関する先行研究に見られる問題の現状を概観した上で、とりわけマイブリッジの連続写真が《医学》のイメージ・ソースとして利用されたと提唱するストルコヴィチの論文を批判的に受けとめながら、特に《医学》の制作途上で描かれた多数の素描に関して、マイブリッジからの影響の実態を作品に即して詳細に明らかにするとともに、激しい運動のなかにある人体を時間的な連続性を伴って多視点的に描出する探究の場としてクリムトが素描を利用した点で、これまでの画業における素描の役割と明らかに一線を画すことを指摘し、こうした身体表現と象徴的な主題との結びつきからモダン・ダンスとの関連性を示唆する。第5章では、《ベートーヴェン・フリーズ》の制作に際して描かれた素描について、人物の輪郭線の微妙な扱いを通じた立体感をはじめとする多様な表現の可能性を試みる場として機能した点を指摘する。第6章では、《ベートーヴェン・フリーズ》に続いて制作された学科絵《法学》とその素描に関して、その後制作されたストックレー邸のフリーズとともに、モダン・ダンスとホドラーの絵画作品と関心を共有している点について考察する。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

本論文は、アリス・シュトロープルが完成作品との対応関係のもとに分類整理したほかは、これまでのところほとんど未研究の状態に留まってきたクリムトの膨大な素描を対象に本格的な研究を行ったほぼ最初の野心的とも言える試みであり、素描と完成作の精密な観察に基づく粘り強い考察を通じて、画家が独自の様式を形成しつつあった世紀転換期の創作活動において、素描という媒体に求められた機能が、イメージ・ソースとしての写真の扱いと連動して大きく変化したという事実とともに、素描をクリムトの芸術的探究の方向性を読み解くための資料として活用する研究上の可能性を提示し得た点で、高く評価することができる。

本論文によって示された主な新知見として、以下の3点が挙げられる。

①クリムトによる素描制作の目的が、ウィーン大学講堂の天井画（学科絵）に着手する以前には、ブルク劇場階段室の天井画に関連する素描をはじめとして、基本的には完成作で描かれることになる全体的な画面構成や、そこにはめ込まれることになる個々の人物像を確定することにあっただのに対し、学科絵の中でも特に《医学》に関連づけられる素描では、完成作のために個々の人物像を練り上げて確定するよりも、運動の状態の中にある多様な身振りの人物像を時間的な連続性において多視点的に捉えるという、それまでのクリムトの画業には見られなかった新たな描写や表現を獲得する探究の場として素描を活用する意図が前景化することを指摘したこと。

②学科絵に着手する以前には、クリムトは個々のモチーフや人物像を完成作にはめ込んでいくための直接的なイメージ・ソースとして写真を利用する傾向があり、ストルコヴィチによる先行研究では、クリムトがマイブリッジの連続写真集を参照しており、そこから《医学》に人物像を転写したという指摘がなされていたのに対し、論者は写真と完成作及び素描の詳細な分析を通じて、直接的なイメージ・ソースというよりも、《医学》に関わる素描に見られるような運動の状態にある身体の描写への強い関心を共有する参考資料として、クリムトがマイブリッジの写真集を利用したことを明らかにしたこと。

③《ベートーヴェン・フリーズ》に関連する素描においては、直前に制作された《医学》に関わる素描とは大きく異なり、運動の状態ではなく静止状態にある人物像の輪郭線の扱いを通じて多彩な表現上の可能性を幅広く追求するための場として素描が活用されている事態を、素描と完成作とを対応させながら明らかにしたこと。

全体に文章が冗長で繰り返しが多く、やや不明確な表現がいくつか見られる点や、クリムトにおける身体表現と象徴的な主題との結びつきと同時代のモダン・ダンスとの関連性についての考察を十分に発展させられなかった点など、今後の研究活動での課題とすべきところがいくらか残ることも確かではあるものの、審査委員全員が一致して、本論文が博士学位論文として水準に達していると判断し、合格と判定した。